



—まずは飛び込んでみる—
土佐工業株式会社 代表取締役社長

しばた ひさえ
柴田 久恵さん



起業から29年。現在では建築、土木、管工事など幅広く施工されている土佐工業株式会社。資格や社員の構成によって引き受ける仕事内容は変わるため、“チーム土佐”でこれまで取り組んできました。そして「今後も社員ひとりひとりを大切にしていきたい」と話す代表取締役社長の柴田さん。本業で実績を重ねながらさらに、女性の働きやすさを求めて「けんせつ姫活動」を始動・運営しています。

今回のインタビューでは、建設業界の変化や活動の経緯、柴田さんならではの人生観、次の姫たちへのメッセージをお伝えします。

—起業のきっかけ／仕事のやりがい

父の仕事を手伝うようにして建設業界へ飛び込みましたが、その仕事のスタイルにとてもしっくりきたのが始まりです。「個が欠けることなく、みんなで連携・協力しあって仕事をし、お客様のところに納める。」このスタイルがスポンとあてはまり、楽しいと感じたんです。入ったばかりの頃は公共下水道の接続工事を担っていて、キレイな作業ではなかったけれど、仕事のスタイルや、形になっていくことの楽しさを感じ、やりがいを見いだして働きました。

ところが「たくさん仕事がある」と言われ、家族総出で千葉へ引っ越してきたものの、わずか2週間で仕事がなくなってしまったんです。それをきっかけに、「下請けでなく自分たちで仕事を探さないともまずい!」と独立することに。これが起業のきっかけでした。

—「人生に無駄はない」

今の自分があるのは、幼少期のつらい経験があったから

幼い頃に、父の連鎖倒産を経験しました。その姿を見ていたけれど、商売をやりたいという思いは捨てられませんでした。小さいながらも自分がブティックを、妹がカフェを将来経営することや、互いの顧客をどう呼び込むか、なんてことを楽しく夢見ていたこともあったので、起業する時には素直に飛び込むことができました。

—建設業界の現状／女性が働き続けられるようになるには

大手ゼネコンでは監督や現場デスクワークが多いと思うので、割と女性が多く働きやすい。一方、現場で働く職人は、大手から仕事を請け負った作業員が大半になります。会社から現場に向かう中、例えば「子供が熱を出したので休

みます」と言えるかということ、それはとても難しい。

建設業の女性が子育てをしながら現場復帰することを考えた時、ここが本当に難しい課題となります。実際、「同僚に同性の先輩がいたが辞めてしまい、相談する相手がいなくなって自分も辞めた」という事例があるほか、アンケートでは「今は独身だから働ける。将来的に子供は欲しいけど結婚したらどうなるかな?」と、働き続けることの難しさを感じている人がいるのが現状です。

例えば急に「保育園に迎えに来てください」となると、まず連絡がいくのは現状では母親ですよね。連絡があった時、少なくとも会社に預けられれば、母親は現場に安心して出やすくなる。私は以前、事務員のお子さんが保育園に預けられなかった時に「会社に連れて来ていいよ」と声をかけたこともありました。子育て以外に、介護している職員にも手を差し伸べてあげられたらと思っています。

—“代わりに立つ” その思いの根底にあるもの

「プライベートと仕事、どちらが大切か」ではなく、どちらも大切だと思っています。

プライベートが上手くできている人は、仕事も上手くいく。仕事が上手くいっている人は、プライベートも上手くいく。反対に何かが下手だと、何か欠けてしまう。もし欠けたとしても、それは誰かが補えばいい話ですよ。そうして協力しあって個々の事情があっても両立できるようにしてあげたいと思っています。

だからうちでは、誰かが代わりに現場に立つ。役員だろうが、社長だろうが、関係ありません。育児や介護などで突発的に休みが必要となった時、代替りの人を手配する。

そこさえクリアできたら、プライベートと仕事の両立はできるとしています。

—「けんせつ姫活動」について

建設業が働きやすい環境になってきていることは確かです。制度が整ってきて産休・育休を取れるようになりました。例えばうちでは週休2日制をいち早く取り入れました。建設業は男社会で怖いと思われていた時代もありましたが、今ではそんな男性の姿は消え、女性にとっては働きやすい状態になっていて、むしろチャンスなくらいだと思います。

だからこそ、女性にはライフステージが変わっても働き続けられることを伝えたいですね。説得力を持たせるには、男性社長が言うより、自分の経験談として発信した方が面白いと思い、始めたのが「けんせつ姫活動」です。女の子たちに「なんだ、やれるんだ!」と気づいてもらいたいですね。

—受賞歴・活動の経緯

第一弾の作業服は女性を建設業界に呼び込みたくて作ったものの、発信力不足で失敗に終わり、第二弾の冊子の作成に移りました。創刊号では、予想以上にメディアが注目してくれて、「日本タウン誌・フリーペーパー大賞2018」の企業誌部門で最優秀賞をいただくことになりました。さらに、テレビ局の取材を受けたり、令和元年度には森田知事から男女共同参画推進事業所表彰奨励賞、2年度には内閣府の女性のチャレンジ支援賞までいただいたりしました。

コロナ禍で活動が緩やかになっていましたが、令和4年にまた忙しくなってきました。

—建設業に女性が増えると

「女性にできるなら、男性にもできるじゃん」と思ってくれて働く男性が増えれば、結果的に男女問わず働きやすい環境になります。男性だってきれいなトイレや更衣室があった方がいいですよね。そうしてさらに建設業を担



内閣府「女性のチャレンジ支援賞」令和2年度受賞の賞状と一緒に。壁に貼られた経営理念からも、柴田さんの「人が好き」というお人柄がよく伝わってきました。



けんせつ姫HPから活動の詳細をご覧ください。



「けんせつ姫」第一弾の作業服を着ています。

う人が増えてくれたらと思います。

—人生は一度きり

20歳で業界に入り、起業を経て30歳前後に壁にぶつかりました。たくさん悩んで苦しんでたどり着いた考えが「人生は一度きりだ」ということ。やらずに後悔するより、とりあえず全部やって、ダメだったらダメで、引き返すなり修正すればいい。でも人ってやる前から頭の中で結論を出して「やれない」と決めつけてしまいがち。でもそれも後悔になる。行動するってそれだけでも大変なことで、得た経験は発想の転換次第で絶対プラスになります。“人生は一度きり”と思えば飛び込めるもので、そうして今日まで頑張ってくることができましたし、「けんせつ姫活動」を始めることもできました。

—男女を問わず

「男女問わず、お互いが助け合っているところを伸ばす」これを自分のフレーズにやってきました。

区別はどうしても、男女でするしかないかもしれませんが、どの人が欠けてもダメで、皆さんで協力してより働きやすく、生活しやすくしたいですね。建設業はもちろん、色々な分野で実現したいですね。それがひいては日本全体に広げられるなら、その活動の一つとして携わっていただきたいと思います。

—将来の夢

種は蒔いてきました。そろそろ芽が出るはず。生活の根幹を支えるインフラが、子供たちの時代になくならないよう、未来の姫たちにバトンを上手に渡せるようにしたいですね。建設業と未来の若い人たちを繋ぐ橋渡しができたらいい。それがかなえられれば、うれしいです。

—学生や若手職人さんへ、メッセージをお願いします。

実例として、この私でも結婚をして、子供を3人産んで、しっかり育てています。

働いている人を守る法律はたくさんあり、守られています。そうして働ける環境はあるので、建設業を就職の選択肢に入れてほしいです。

それから建設業に限らず、人生では色々なことにトライしてほしいですね。とりあえず飛び込んで、後で変わればいいじゃない。「けんせつ姫」の取材をしても、異業種から転職してきた人はたくさんいます。どこかで修行して5年、6年後にでも建設業に転身するパターンも十分あります。

学生時代に違う分野にいたとしても「建設業でも働けるんだ」ということを覚えていてくれたらうれしいです。